
はんぶんこのコロッケ

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はんぶんこのコロツケ

【Nコード】

N4059M

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

キテレッツとコロ助はお肉屋さんへコロツケを買いに行った…なければの六十円を握り締めながら…

（前書き）

ソースも美味しいですがコロッケは醤油も合うと思います

「ひとつのものはんぶんこしよう。」

「はんぶんこすればふたりでたべられるから。」

「おいしいものをふたりでわかちあえるから。」

「ケンカをしないですむし、ケンカをしてエネルギーをつかうとおなかがすいちゃうから。」

「だからはんぶんこにしよう。」

「木手家。」

『おなか…すいたナリ…』

「コロ助…。」

「木手英一…通称・キテレツは腹を空かせる相棒のからくりロボツト・コロ助と共に二人で力無くうなだれていた…。」

「キテレツの顔や身体は小学生のものとは思えぬ程、ガリガリに瘦

せ衰え、目と頬は窪み、肌の色も土気色になり…ほとんど骨と皮だけの状態だ。

・コロ助もまた同様の状態であつた、ロボットのくせに何故体型や色が変わるかは謎であるが…。

・家には食べ物は一切ない、それどころかお金もほとんどない…。

・しまいには両親の姿もない、家には何もない、空っぽだった…。

・今の木手家の家庭は最悪なものになっている…何故こうなったかという…。

・数ヶ月前。

「…え？パパが…会社をクビになった…。」

「ああ…リストラって奴だよ、英一、コロ助…。」

「あなた…！」

『そんな…どうしてナリか！？』

・父親が突然リストラされた…それは衝撃の一言だった…。

「チクシヨオオオオオ！！オレを誰だと思ってやがるウウウウウ
！！あああああああ！！」

「きゃああああ！？」

「ママ…！！やめて！やめてよ！パパ！！」

「うるさい！子供が親に逆らうのかアアアアアアア！？」

「痛い！やめて…痛いよ…！！」

『キテレツ！！ギャツ！？』

・父親はヤケになって酒を浴びる様に呑み、アル中になり、母親は
もちろんキテレツやコロ助にまで暴力を振るう様になった…。

「オラア！バイオレンスローンだ！！金は出来たか？ああん！？」

「す…すみませ…ギャアツ！？」

「パパ！！」

「毎度、伊美利商興いみりですけど…？お金はちゃんと返しませうね木
手さーん？借りたもの返さないと泥棒だよ、コレ？いい加減にしね
えと火イつけんぞゴラアツ！！」

「…すみません…すみません…。」

「ママ…。」

「どーもー」^{がめつ}亀津井金融でーす」おうおう木手さんよあ…金ないなら内臓売るなりなんなりしな…返すアテがないのに金借りてんじやねーっての…！」

『ひいいいい…。』

「助けてえええええ…。」

・貯金は酒代に全て使い、ついにはサラ金にまで手を出してしまい…毎日毎日借金取りがやって来て『金返せ!』『殺すぞッ!』と脅し、暴力を振るう。

「それだけは!奇天烈斎様の…御先祖様が残した大切なものなんです!それを持ってかれたら僕は…あがああああ!？」

「…っせーんだよ!!ガキがアッ!金を返さねーテメエの親のせいだろが!おおコラ、テメエ!？」

『キテレツに何をするナリか!?!ゲボッ!!!』

「ガラクタ風情がイキがんなッ!！」

・家具や電化製品…しまいにはキテレツにとって命の次に大切な御先祖…奇天烈斎の発明品が書かれた『奇天烈大百科』までも借金のカタに持ってかれてしまった…。

「うつ…酒!…酒をくれ!酒がないとオレは…がああああ…うぐ、げ…がはあ!!!」

・ピーーーーーー…。

「パパ…？パパー！！パパアアアアアア！！」

『わあああああああ！！』

・そしてついに父親は度重なる酒の暴飲を続けた結果…胃を悪くし、数日後…この世を去った。

『英一へ、お母さんは遠いところへ行ってきます、コロちゃんと一緒に強く生きてください…母より』

(…ママ)

・母親はというと、彼女もヤケになり、ホスト遊び（正確に言うときぎ）に明け暮れ…そして昨日、キテレツ達を置いてホストと外国へ行ってしまった。

「学校やめちまうんだってな…なんかあったらいつでも言えよ！キテレツ！」

「そうよ！私達、友達じゃない！！」

「ブタゴリラ…みよちゃん…ありがとう…。」

・こういった事情もあり、キテレツは学校を辞めた…友人達は心配してくれたがキテレツは『大丈夫だから』と力無く笑い、学校を去った…。

「…もう、これしかないんだな…。」

・そして現在…キテレツは貯金箱を叩き割り、十円玉が六枚…60円を眺めて苦笑する、これがキテレツの全財産だ。

・小学生のキテレツではろくにバイトも出来ないお金で稼ごうにも稼げない…食べ物もない、水道もガスも電気も止められた…貯金も全て借金で消えた…だからもう、これが無くなったら…。

・それでも、彼は…。

「コロ助、お前の大好きなコロツケを買いに行こう。」

『でも…それを使ったら…。』

「いいんだよ。」

・渴いた笑みを浮かべながらキテレツはコロ助の丸い手を握り締め、町へ向かう…。

・ガリガリになり、みすばらしい格好の二人を町中の人間達は奇異の目で見ると、しかし今の二人にはそんな視線すら関係なかった…。

- 精肉店。

「さあ揚げたてだよ！アツアツサクサクの内にどうだい、お客さん！？」

- このコロッケは一個六十円、出来立てアツアツ、安くて美味いが信条の逸品であり、夕飯のオカズに出す主婦やオヤツ代わりに買い食いする学生に大変人気だ。

「すみません…。」

「へい、いらつしゃ…うぐ！？」

- 普段、肉屋の店長は自分の店の客を見た目で判断するような人間ではないが…今回はかりは無理だった、土気色の肌のガリガリに痩せた子供とロボットが店の前に突っ立てりゃ誰だって『なんだ…？』と思うだろう…。

- しかもかなり臭う…それもそのはず、キテレツは風呂にもう何ヶ月も入ってない…。

「コロッケ…一個、ください…。」

「解った！解ったから…これ持ってとっと帰んな…！」

「ありがとう、ございます…。」

『ああ…数ヶ月ぶりのコロッケ、ナリ。』

- 店長が乱暴にコロッケを一個、小さい紙袋に包んでキテレツ達に

やると、まるで八工を追い払うかの様に彼らを追い出した…。しかしキテレツ達は何も反論せず、丁寧な御礼の言葉と共に六十円を支払って、素直に出ていった…。

・そして家に帰りながら、コロツケを取り出すキテレツとコロ助。

「コロツケ、君が食べなよ…コロ助。」

『キテレツ…そんな、ワガハイだけでは…キテレツの方がお腹空いてるナリよ？だからキテレツが…』

・コロ助はロボットだから無理すればなんとか堪えられるが…極限の飢餓状態である人間のキテレツの方がヤバかった、だが。

「いいんだよ…ほら？コロツケ食べたかったんだろ？それに…。」

・そしてキテレツは言った。

「君は、友達だから…。」

『キ…キテレツ…ワガハイ…ワガハイ…うえ、えええ…!!』

・コロ助はそのたった一言で涙・汗・鼻水・涎…顔から出る水分^{もの}が全部出てしまい、嗚咽を漏らす…。

『だったら…はんぶんこ、するナリよ…それなら、二人で…食べられる、から…!!』

「ありがと…コロ助…。」

・泣きながら言うコロ助にキテレツは優しく彼の頭を撫でてあげながら、二人はコロツケを半分に割り…はんぶんこにした。

・まだ揚げたてなので割るとホカホカな湯気が立ち、サクサクな衣に包まれた中身のジャガイモはとても美味しそうだった。

「…いただきます。」

『いただきます…ナリ…。』

・両手をうち震わせながら…はんぶんこにしたコロツケをいぎ、口に入れようとした時だった。

・バsshャー…

・通り掛かった車の泥水が派手に跳ねかかり、コロツケを落としてしまった。

「あ…ああ…!!」

『コロツケが…泥まみれナリ!!』

・ けなしの全財産を使って、周囲の視線にも堪えて、ようやく買えたコロッケが泥にまみれ…地面に落ちている、無残なコロッケの成れの果てを泣きながら、地面に両手をついて見てると…。

「あるえー？キテレツとコロ助じゃん？」

『トンガリ…！？』

・ 車から同級生だったトンガリが降りて…。

・ グシャツ…。

「やめろ！コロッケ…コロッケがア…！！」

「はあ？コロッケ？」

・ 落ちてるコロッケを知らずに踏みつけたトンガリはなんのことがサッパリな様子だった。

「しかし…人間堕ちるとこまで堕ちるよなあ？一瞬誰だかわかんなかったよ。」

『…。』

・ トンガリは実は前々からキテレツが気に入らなかった…みよが彼になびいていたことを薄々感じてたから、そしてトンガリはムシケラでも見るような…実にムナクソ悪い目つきでニヤけた。

「全く…父親は死んで、母親は男と逃げ、挙げ句には学校を辞めて…今、二人はこんな薄みつともねえ姿でたかが安物コロッケ一個で

泣くんだからウケるよな♪ヒヤハハハハハハ！！ペツ！！」

『うわ！？』

「うえ！！」

・口汚く罵声を浴びせながらトンガリは唾を二人の顔目掛けて吐き出しながら見下す。

「ほら、何やってるザマスか？そんな貧乏人ほつといて早く高級レストランで分厚くて美味しいステーキとデザートには超ウルトラデラックスジャイアンストロベリーパフェでも食べるザマスよ。」

「解ったよ♪ママー♪じゃあな…二度と僕の目の前に現れるなよ！もちろん僕の女みよちゃんの前にもな…。」

・母親に呼ばれて態度をコロコロ変えるトンガリの心底二人をバカにする姿…OK、もう我慢の時間はおしまいだ、ここで黙ったままならばブタゴリラだったら躊躇わずに自分のキ。タマ切り落とすだろう、つまり男が廃るということである。

「うがあああああああ！！」

『ナリイイイイイイ！！』

「ひ…！？いぎやあああ！！」

・キテレツとコロ助は猛獣ケタモノの様な怒号を上げて、その辺の石やビール瓶を拾ってトンガリの脳天をカチ割ったり、刺したりした。

「判決…死刑。」

「『!?!?』」

（ホホホホ…息子の無念は晴らしたザマス!!うっ…。）

・トンガリの母親が裁判官を多額のお金で買収し、二人を陥れる策に出た…例えばムナクソ悪いドラ息子だろうと、母親が子供を愛するが故の復讐^{いっしょ}だった。

「そんな…嘘よ!?!小学生が死刑なんて!!」

「キテレツー!!そんなー!?!」

「死ぬな!ラッシャイ!!」

・裁判の席にいたみよちゃんや熊田親子は彼らに下された『理不尽』の一言では済まされない判決に泣き叫ぶ。

・そして二人の処刑方法は極めて残忍残酷なものだった…。

・まずコロ助は鎖で縛られ、十字架に磔にされ…グラグラ煮立った超高温の熔鉱炉に突っ込まれてしまった。

『グギャオエアアアアア!!熱イイイイイイ!!痛ギヤアアアアアアア!!』

・…ジュウウウ…。

・気が狂いそうなまでの身を焼かれる熱さと痛みに苦しむコロ助は

やがてドロドロに溶かされた。

・そしてキテレツは、柱に縛りつけられ…目隠しをされ、銃殺刑にされることになった。

「構え…撃てーーーーッ!!」

「ハッ!!」

・ズガガガガガガガガ!!

「うぎゃああああああ!!」

・そしてキテレツは無数の銃弾を浴びながら血まみれになり…絶命する。

・キテレツとコロ助は、コロツケーっ…例えはんぶんこだとしても一切口に出来なかった…それだけが二人の心残りだった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4059m/>

はんぶんこのコロッケ

2010年10月10日02時22分発行